

青木繁「海の幸」誕生と日露戦争の時代 ③

講師 愛沢 伸雄（NPO 法人安房文化遺産フォーラム代表）

日本を代表する洋画『海の幸』は、1904（明治 37）年夏、40 余日小谷家に滞在した青木繁によって描かれた。この夭折の画家は河北倫明氏をはじめ数多くの研究者によって世に出され、『海の幸』は日本美術史に位置付けられ国重要文化財となった。

ところで 2005 年から館山市富崎地区では漁村のまちづくりに取り組みながら小谷家住宅を市有形文化財とし、地元はもちろん全国からの支援で小谷家住宅修復事業をすすめ、昨年青木繁「海の幸」記念館として開館した。その経緯のなかで、小谷家からは明治期の水産業など人びとの動きを知ることができる貴重な資料が発見された。



【石橋財団ブリジストン美術館蔵】

これまで青木繁『海の幸』誕生について、明治期の館山・富崎の地を踏まえた地域史からの視点、とくに日露戦争の時代のなかで小谷家に関わる人びとや漁村の文化的な交流の視点からの考察は限られている。また、青木らの布良訪問や『海の幸』誕生の背景についても、美術史的な視点や青木繁の関係者のみの証言で語られてきた。

本報告では、発見された資料から青木繁が訪れた布良の地や小谷家に関わる人びとの姿、とくに「海軍望楼」という軍事施設や「帝国水難救済会布良救難所」が設置され、ときに軍事演習の地であった景勝地・布良の姿、また布良沖のウラジオストク艦隊の動きによる危機的状況など、日露戦争の戦時下、富崎の人びととの交流にもふれ、なぜ 40 余日も小谷家に逗留し、しかも絵画制作ができたのかを含め地域史の視点から私なりの考察をしたい。

< 目 次 >

- | | |
|------------------------------------|--------|
| 1. これまで書籍に記載される「通説や証言」をみる | 2 ページ |
| (1) 青木らの布良訪問の背景をさぐる | |
| (2) 「海の幸」誕生の背景をみる | |
| 2. 小谷家資料や国会図書館にある明治期の「布良」を紹介した資料 | 7 ページ |
| (1) 青木繁が訪れた景勝地・布良 | |
| (2) 布良の医者 | |
| 3. 青木繁らが逗留した小谷家をさぐる | 12 ページ |
| (1) 小谷喜録とその家族 | |
| (2) 石井家の人びと | |
| 4. 日露戦争のなかの「布良海軍望楼」と「帝国水難救済会布良救難所」 | 19 ページ |
| (1) 東京湾要塞の最前線「布良」 | |
| (2) 日露戦争勃発と要衝の地「布良」での動き | |
| (3) 「帝国水難救済会布良救済所」と日露戦争 | |
| 5. 日露戦争時下の富崎の民衆と青木らの姿 | 28 ページ |
| (1) 富崎・漁村の姿をみる | |
| (2) 漁村のまちとくらしをみる | |
| (3) 地域と青木繁から日露戦争を考える | |

3. 青木繁らが逗留した小谷家をさぐる

(1) 小谷喜録とその家族

青木繁らが訪れた1904(明治37)年7月17日の小谷家一家の様子を見る。

まず「5人」家族であった。戸籍原本では喜録の父治助が記載されているが、青木らが逗留する2年前の1902(明治35)年9月に65歳で亡くなっている。

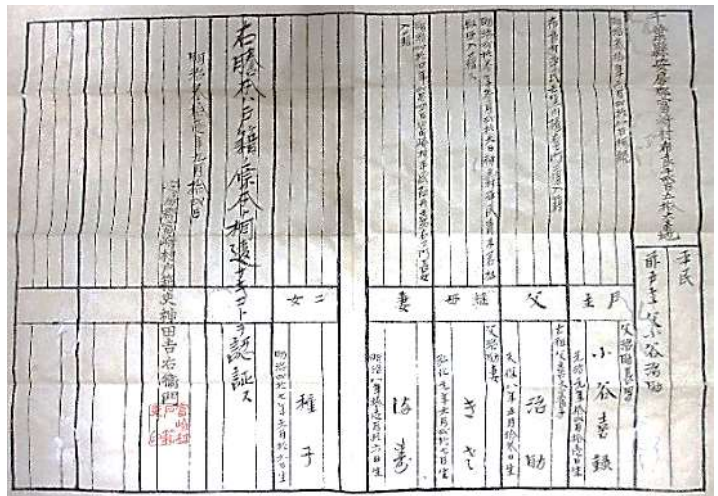
治助の後妻きさ(60歳)がおり、先妻つね(58歳)が1889(明治22)年に亡くなり、翌年治助(54歳)は神戸村青木若松の叔母である「きさ」を後妻とした。なお、きさは1914(大正3)年に73歳で死去。治助は黒川権右衛門からの養子で、布良村の漁師頭となり初代布良区会議員であり、水産業振興のために神田吉右衛門村長らとともに村政を牽引して

いた人物。喜録は父治助の地域貢献の姿を見ながら成長していたことが、村政にも関わり、生涯にわたって村政では極めて重要な立場にあったと推察している。明治31年9月に作成した戸籍には、明治36年12月4日に養子となった「ゆき」の記載はない。治助後妻きさの姉ゑい(神戸村藤原の小川家父勘蔵・母満きは死去し、ゑいが戸主)故小川勘蔵二女「ゆき」5歳(明治31年5月13日生)は、戸主小川ゑいからきさの養子(女)となっている。青木らが来た1904(明治37)7月、小谷家は五人家族であった。

なお、小谷家を資産面からみて富崎村布良でどのような位置にあったかが不明であったが、年代は明治30年代であったと思われる。この資料から小谷家は「漁船4隻」を所有しており、富崎村ではかなりの資産家であることがわかる。資産総額も記載されている他の布良漁業組合員らと比べて、布良ではトップクラスにあった。

戸主「小谷喜録」戸籍原本(小谷家蔵)

(明治31年9月12日)



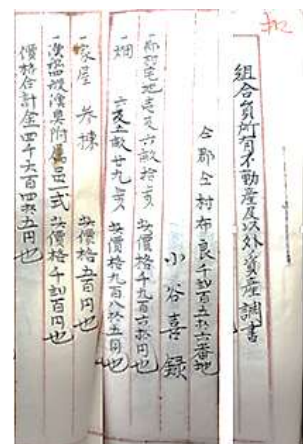
【小谷家の資産】

『組合員所有不動産及以外ノ資産調書』(神田家文書・館山市博物館蔵)

富崎村布良千式百五拾六番地 小谷喜録

- | | | |
|---------------|---------|------------|
| 一、郡村宅地 | 壹反六畝拾歩 | 此価格千九百六拾円也 |
| 一、畑 | 六反五畝廿九歩 | 此価格九百八拾五円也 |
| 一、家屋 | 参棟 | 此価格 五百円也 |
| 一、漁船四艘漁具附属品一式 | | 此価格 千式百円也 |

価格合計 金 四千六百四拾五円也



(2) 小谷喜録の生涯をみる

① 年表 1864(元治元)～1926(大正15)年 62歳没

1837(天保8)年5月 黒川権右衛門治助出生。のち小谷市松(喜六)の養子に。

1864(元治元)年12月 鮮魚仲買商の父治助のもと喜録(幼名・市松)出生。

1868(明治元)年 父治助が漁師頭に選任される。

1874(明治7)年4月 龍樹院に布良小学校開校。

喜録(10歳)布良小学校卒業後、千葉・東京の私塾で和漢を学ぶ。

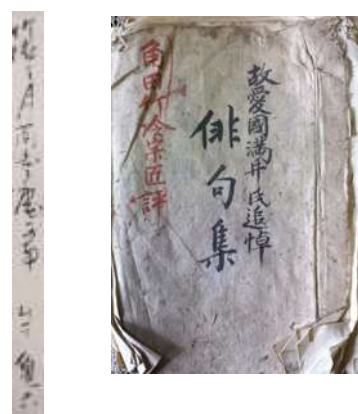
1876(明治9)年 布良で大火229戸焼失

- 1879（明治 12）年 布良村と相浜村が合併し富崎村
- 1882（明治 15）年 青木繁が福岡県久留米に出生。
- 1883（明治 16）年 治助、衛生委員に就任。
- 1884（明治 17）年 9 月 治助、布良村会議員に選出
- 1887（明治 20）年 蓮寿院の相浜小学校と合併して富崎小学校になる。
- 1888（明治 21）年 2 月 喜録、富崎尋常小学校授業生（教員）となる。
- 1889（明治 22）年 町村制実施により正式に布良村と相浜村が合併し富崎村。
富崎尋常小学校と改称。布良区の初代区会議員に小谷治助。
治助妻つね（58 歳）死去。
- 11 月 21 日 布良の大火で 74 戸焼失（小谷家も焼失）**
- 1890（明治 23）年 治助（53 歳）、青木きさ（46 歳）と再婚。喜録（26 歳）、教員退職。
8 月 内村鑑三が引率して水産伝習所生徒実地演習のため小谷家訪問。
9 月 10 日 関澤明清、小谷喜録に礼状（『日本重要水産動植物之図』贈呈）
- 1891（明治 24）年 2 月 喜録（27 歳）、石井嘉右衛門長女満寿（16 歳）と結婚。長男喜三郎誕生・乳児死去。
- 1892（明治 25）年 喜録（28 歳）富崎村政に関わる。父治助は村会議員、
- 1893（明治 26）年 富崎尋常高等小学校となる。（村長神田吉右衛門～明治 32 年まで）
- 1894（明治 27）年 新校舎完成。6 月 喜録（30 歳）、二女種子誕生
- 1897（明治 30）年 6 月 喜録、家督相続。12 月 1 日 安房水産会富崎村委員に就任。
- 1901（明治 34）年 喜録の義父石井嘉右衛門が富崎村長。喜録、村会議員に就任。
- 1902（明治 35）年 7 月 富崎村政に貢献したことから感謝状と銀杯を授与。
9 月 喜録（38 歳）の父治助が死去（66 歳）
- 1903（明治 36）年 3 月 帝国水難救済会布良救難所創立。石井村長が所長、喜録は看守長となる。故小川勘蔵二女ゆき（5 歳）を継母きさの養子とする。
- 1904（明治 37）年 日露戦争勃発。**
青木繁、東京美術学校卒業。青木繁、森田恒友、坂本繁二郎、福田たねの 4 人は写生のため布良に来る。柏屋で一泊後、帝国水難救済会布良救難所の仕事で忙しい小谷喜録宅への逗留となる。
《小谷家の家族は祖母きさ（63 歳）・喜録（40 歳）・満寿（30 歳）
種子（9 歳・富崎尋常小 3 年生）・ゆき（6 歳）》
- 1905（明治 38）年 青木繁と福田たね、西岬村伊戸の円光寺に逗留。
- 1909（明治 42）年 富崎漁船改良会社設立に当たって株主になる。
- 1911（明治 44）年 青木繁、28 歳で死去。石井嘉右衛門（64 歳）と妻が死去。
- 1912（明治 45）年 布良救難所看守長として帝国水難救済会総裁より銀製賞標授与。
- 1914（大正 3）年 二女種子、千葉女子師範学校卒業。治助の後妻きさ 71 歳で死去。
- 1915（大正 4）年 種子が東葛飾郡川間尋常高等小学校訓導赴任するも 22 歳で死去。
- 1918（大正 7）年 喜録の妻満寿が 44 歳で死去。
- 1923（大正 12）年 布良の大火 137 戸焼失。富崎村消防組頭で消防聯合表彰状授与
9 月 1 日 関東大震災勃発し、1 名死亡、家屋 70 戸・船 119 隻流失。
喜録は富崎村助役として救援活動に尽力。
被害を受けた布良漁港復旧事業に奔走。
- 1926（大正 15）年 喜録、63 歳で死去。



喜録・満寿夫妻

二女種子



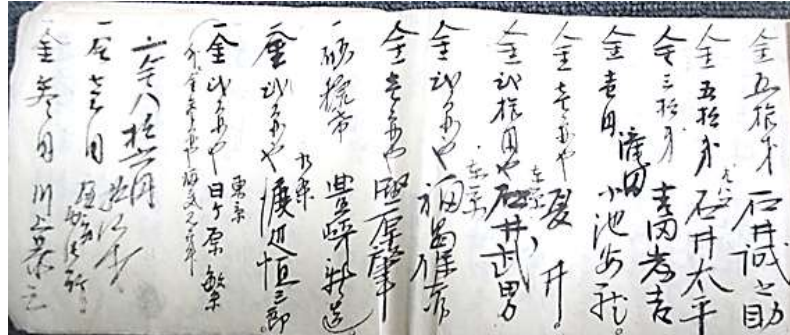
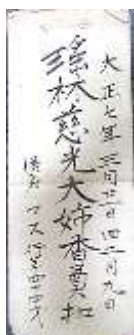
満井武平（俳号：愛国）

【小谷喜録は俳句を嗜み、俳号は「亀六」といった】

「追悼俳句集」角田竹冷宗匠評

② 妻満寿・娘種子の香典帳から関係者をさぐる

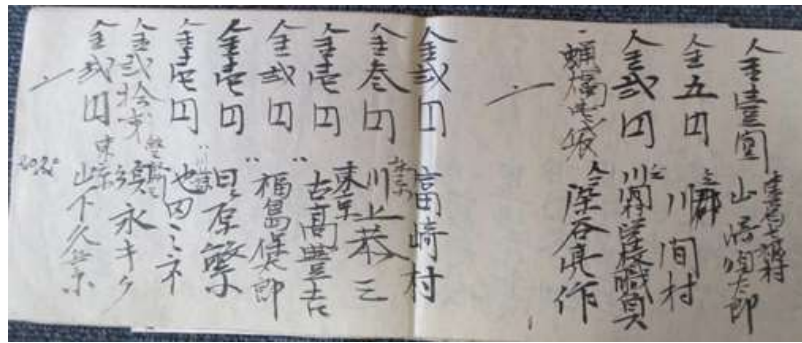
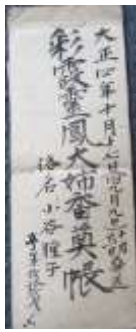
●満寿の香典帳 1875（明治8）年～1918（大正7）年 （44歳没）



【「石井武男」「日箇原繁」「川上恭三」らの名前が見える】

●小谷種子の香典帳 1894（明治27）～1915（大正4）年

（二女種子が川間小学校訓導として赴任するも1年後に22歳で死去）



【「川上恭三」「日箇原繁」らの名前がみえる】

（3）石井家の人びと～小谷喜録妻「満寿」の存在

① 喜録の義父石井嘉右衛門とその家族（石井雅人氏資料提供）

石井嘉右衛門直幸 1848（嘉永元）～1911（明治44）年（64歳没）

妻 寿め 1856（安政3）～1911（明治44）年（58歳没）

父親の直廣は神田家からの養子で吉助（文吉）。相浜の石井家と布良の神田家は婚姻関係をもっていた。石井嘉右衛門は15歳で相浜村名主になり、1870（明治3）年に相浜村戸長、1897（明治30）年には富崎村長となった。1903（明治36）年3月、帝国水難救済会布良救難所長となり、日露戦役の功で勲七等青色桐葉章及び金50円を授与される。1907（明治40）年に帝国水難救済会より功績により銀杯を授与。

この年に村長を辞し、1911（明治44）年8月に妻寿めが58歳で亡くなると、後を追うように9月64歳で死去している。



長男 石井嘉男 1870（明治3）～1933（昭和8）年（64歳没）

妻 ちせ 1873（明治6）～1941（昭和16）年（69歳没）

② 次男 石井武男をみる

1872（明治5）～1934（昭和9）年（63歳没）

妻 米 1883（明治16）～1919（大正8）年（37歳没）

東京市京橋区西紺屋町16 山下久兵衛娘

1901（明治34）年18歳結婚

A. 石井武男の軍人経歴をみる（『石井嘉右衛門家歴代系図書』より抜粋・石井雅人氏蔵）

1872（明治5）年4月 石井嘉右衛門直幸二男として出生

1888（明治21）年4月 成城学校入学

1890（明治23）年12月 士官候補生として近衛砲兵連隊入営

1893（明治26）年7月 陸軍士官学校卒業

1894（明治27）年5月 陸軍砲兵少尉任命 野戦砲兵第3連隊第6中隊附

1895（明治28）年10月 「明治貳拾七八年戦役ノ功ニ依リ勲六等単光旭日章及金貳百圓ヲ授ケ賜フ」

1896（明治 29）年 11 月 陸軍砲兵学校教育課程卒業
 1901（明治 34）年 7 月 野戦砲兵第 18 連隊中隊長
 8 月 陸軍結婚条例により号式結婚。妻・高橋米（18 歳）
 1902（明治 35）年 11 月 勲五等瑞宝章
 1904（明治 37）年 4 月 近衛野戦砲兵連隊補充大隊中隊長
 10 月 野戦砲兵第 13 連隊大隊長
 11 月 野戦砲兵第 14 連隊大隊長 陸軍砲兵少佐任命
 1906（明治 39）年 3 月 近衛野戦砲兵連隊第 2 大隊長
 4 月 「明治三十七八年戦役ノ功ニ依リ功四級金鷄勲章並二年
 金五百圓及勲四等旭日小綬章ヲ授ケ賜フ」
 1912（明治 45）年 4 月 「皇后陛下沼津御用邸御滞在中ノ供奉仰付ラル」
 5 月 陸軍砲兵中佐任命
 6 月 「皇后陛下鎌倉御用邸ニ行啓ニ付供奉被仰付」
 1914（大正 3）年 5 月 「昭憲皇太后大喪儀ニ於テ代々木桃山間ノ供奉ヲ被命」
 8 月 野戦砲兵第 7 連隊長
 1916（大正 5）年 8 月 陸軍砲兵大佐任命
 1934（昭和 9）年 1 月 東京市赤坂区青山南で死去（63 歳）

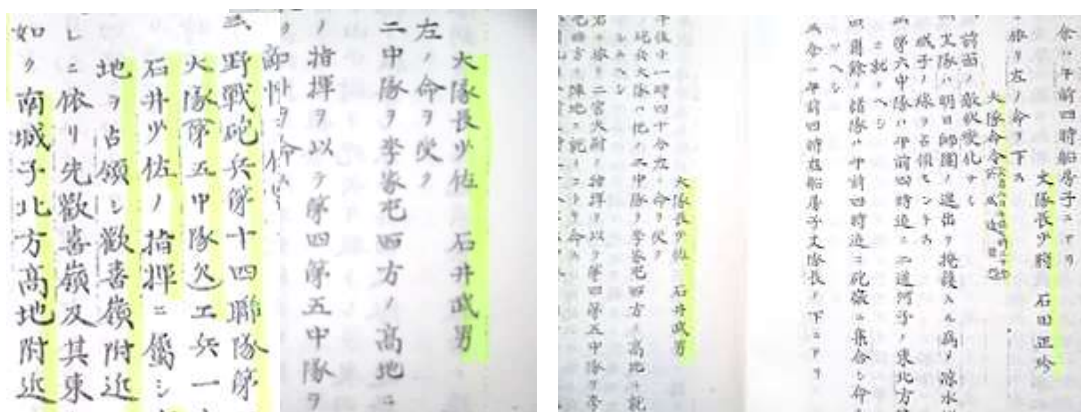
B. 「陸軍少佐 石井武男」と日露戦争

青木らは、小谷喜録から妻満寿の兄武男の軍人であることや、将兵たちの戦場での姿など話を聞いたであろうか。喜録は仕事のこともあり、新聞を購読していたはずである。



【小谷家から発見された写真】

日露戦争時の『野戦砲兵 14 連隊』（明治 38 年 3 月～6 月）石井武男少佐（国会図書館蔵）



長女・石井満寿 1875（明治 8）～1918（大正 7）年 （44 歳没）
 1891（明治 24）年 1 月 小谷喜録（27 歳）と結婚（16 歳）

夫・小谷喜録 1864（元治元）～1926（大正 15）年 62 歳没
二女・石井里ん 1877（明治 10）～1948（昭和 23）年 72 歳没
夫・上野幹太郎 1863（文久 3）～1941（昭和 16）年 79 歳没

- ③ 夫・日箇原繁 1871（明治 4）～1944（昭和 19）年（74 歳没）
三女 石井多美 1880（明治 13）～1925（大正 14）年（46 歳没）

【住所：東京都本郷区湯島切通町 19 番地】

A. 「日箇原繁」という人物から青木繁との接点をさぐる

1871（明治 4）年 3 月 6 日 飛騨高山 高山市下一之町で出生

父・清吉 大賀屋・生糸・和紙販売 1876（明治 9）年戸長

1882（明治 15）年頃まで岐阜県議会議員

家業が没落したことで繁は高山中学中退する。明治中期に「名古屋」に移住。この時期、に日箇原繁は、福岡県久留米出身のユニヴァサリスト教会牧師赤司繁太郎と親しくなり、後に赤司牧師から洗礼をうけユニテリアン（自由キリスト教徒）となった。日箇原一家は「明治 30 年代」、東京市日本橋西河岸に移住したという。そして、1898（明治 31）年から 3 年間、安孫子貞治郎・坂井義三郎・佐伯好郎らとともに、内村鑑三主筆の雑誌『東京独立雑誌』の編集（月 2 回）に従事したものの 72 号で廃刊となったという。

その後、星野錫の出版社「画報社」に関わり、絵画と文学を交流させる画期的な雑誌『月刊スケッチ』の発行兼編集人とか、1907（明治 40）年版から 1911（大正元）年版まで『日本美術年鑑』の編集主任で、『日本書家画家年表』などの著者になっている。

親しい友人として児玉花外や中村有楽、坂井義三郎、佐伯好郎といい、なかでも坂井義三郎（1871（明治 4）～1940（昭和 15）年）は、美術関係で重要な人物であった。坂井は、号を犀水といい、1871（明治 4）年に石川県金沢で出生している。1891（明治 24）年に帝国博物館技手兼臨時全国宝物取調局技手となり、後に辞任し関西学院などで宗教学を研究。1901（明治 34）年に『東京評論』を発行し、また『美術画報』編集に従事するとともに、1905（明治 38）年には白馬会機関紙『光風』の編集にあたりながら、『月刊スケッチ』の編集に参画している。黒田清輝など白馬会系の画家たちとの交流が深い。第 1 回白馬会賞の青木繁作品のことには詳しい人物である。

1910（明治 43）年に『美術新報』主幹となり、その後、『美術週報』も主筆となった。1913（大正 2）年に国民美術協会創立に参加し、理事兼主事。美術評論家として西洋美術を紹介し、明治末期画家の批評をおこなった。著書に「画聖ラファエル」「黒田清輝」などがある。

日箇原繁は、その後、明治薬学専門学校（校長恩田重信）で学んで薬剤師となり、明治 40 年代に酸素吸入器「オキシダータ」を製造販売し、製品の書籍も出版している。晩年は、大倉洋紙店（大倉文二・大倉邦彦）系列の貿易会社「大文洋行」に勤め、1940（昭和 19）年に 74 歳で亡くなっている。

（石井雅人氏提供：父故英夫書簡に「父・日箇原繁のことども」（日箇原久）

『枯れすすき』第 20 号（非売品）野口存彌 平成 8 年）

B. 「画報社」所在地：東京都本郷区湯島切通町 25 番地（日箇原繁は「19 番地」）

画報社の創立年は不明といわれているが、最初に手がけた美術雑誌『美術画報』が 1894（明治 27）年に創刊しており、続いて 1897（明治 30）年に『美術評論』、1902（明治 35）年には『美術新報』を創刊している。

画報社は山東直砥が創設し、当初から東京印刷株式会社所長星野錫が協力し経営に当たり、編集責任者は小原大衛や坂井義三郎などで、なかでも岩村透は編集や執筆に積極的に参加したという。



「画報社」出版物

●調査ポイント

- 「久留米」出身のユニヴァーサリスト教会牧師「赤司繁太郎」
- 坂井義三郎と「日箇原繁」は「画報社」を通じて、東京美術学校と関わっていたので、第1回白馬賞をとった青木繁と面識があった可能性がある。

【 a. の検証 】

久留米出身のキリスト教牧師赤司繁太郎と繋がりがあったかどうかポイントである。

「河北」調査研究で述べたように、1902～03（明治35～36）年の「窮乏」の時代は、梅野や森田などの仲間以外に、その「窮乏」を救うために援助していた人びとがいたかどうかにある。キリスト教会関係者などが想定されるが、その伏線には「旧約聖書」の挿絵を描いたというだけではなく、「赤司繁太郎」という人物と関わっていたのではないかと推察する。赤司は、牧師だけではなく、雑誌や書籍出版に関わり、なかでも青木繁も読んだであろう「ギリシャ神話」を日本で初めて翻訳して出版した人物という。

また、日露戦争前夜の世情のなかで、内村鑑三らをはじめキリスト教的な平等思想の広がりのもとで、社会主義や労働運動の高揚もあり、平和や平等、非戦と関わって牧師赤司繁太郎の活動は、久留米出身であり青木も耳にしたかもしれない。さらに東京では当時久留米出身者の集まり（藩主有馬氏を通じて「水天宮」参りが盛んになってきたという）があった。青木が水彩ハガキなどの販売にあたって、久留米出身者と関係があったといわれているので、赤司牧師のことも聞いていたのではないか。

ついでに久留米出身者として東京帝大法科大学卒業の弁護士「城数馬」がいる。高山植物が好きで日光によく行っていたが、定宿にしていたのが福田たねの父豊吉の実家の旅館であった。そこで知り合ったのが植物画を描いていた画家「五百城文哉」で、二人は意気投合して高山植物の観察活動をおこない新種を発見している。

この人物こそ「福田たね」や小杉未醒の画塾の先生であり、後にたねの父豊吉は城数馬から、青木繁が将来有望な画学生であると聞いた可能性もある。つまり、たねを通じて教師であった豊吉は、貧しい画家青木繁を支援していこうと考えたのではないか。

『青木繁』（角川新書）において、河北は豊吉が親戚の県議から青木を日光美術館長に就任させる依頼を受けたと記載し、青木は明治37年頃からたねの実家と関わりがあった可能性があるとする。そうするとたねの父豊吉が、布良に写生旅行に行く二人分の資金を出したかもしれない。

【 b. の検証 】

坂井義三郎（犀水）が黒田らの白馬会関係者や「画報社」とも交流があったので、第1回白馬賞を受賞した東京美術学校学生青木繁と繋がりがあったという可能性はどうだろうか。

その理由の一つは、坂井が「河北」調査研究で指摘した朝日新聞（1904（明治37）年10月10日付）の日曜評論では「白馬会第8回展」の青木作品を高く評価している。この坂井の背後に「画報社」に勤めていた「日箇原繁」という編集者がいたとすると、もし青木らが布良に写生旅行に行く

という話をした時に、義兄小谷喜録を紹介したとも考えられる。

絵画と文学との積極的接触や交流をはかる雑誌（月刊・菊判・各巻約 50 頁）として 1905（明治 38）年 4 月に『月刊スケッチ』が創刊されたものの、翌年 3 月に第 12 号で廃刊となった。この『月刊スケッチ』創刊号の発行兼編集人が「日箇原繁」であり、巖谷小波・徳富蘆花・正宗白鳥などの著名人が賛助し、この時代を代表する泉鏡花・広津柳浪・徳田秋声・島崎藤村・国木田独歩などが寄稿した。